

昔話の比較研究

A・アールネ
敬吾 著
関 訳

民俗民芸双書
40

せき けい こ
関 敬 吾

明治32年7月15日 長崎県に生まる。

現 在 東洋大学教授

著 書 『民話』(岩波書店)・『日本昔話集』(角川書店)・『日本民俗学入門』(改造社)・『民俗学方法論』(岩波書店)・『日本の昔ばなし』(岩波書店)・『昔話と笑話』(岩崎美術社)

民俗
芸 双書

40

昔話の比較研究

一九六九年五月十日発行
定 価 六八〇円

著 者 アン・テイ・アール・ネ

訳 者 ©関 敬 吾

発行者 岩 崎 治 子

印刷所 光 明 社

製本所 光 明 社

発行所 岩 崎 美 術 社

東京都千代田区神田神保町一六五

電話 東京(三九一)三二二一、四

振替 東京九〇六四九

著者了承・検印廃止

序 説

この著作は昔話研究者に地理・歴史的研究方法を紹介するつもりで書いたものである。第一章では、昔話について、とくに昔話の起源について、その一般的な二、三の着眼点を現在の研究によって認識できる範囲で述べよう。第二章では、昔話のなかで起る諸変化を述べたものであるが、昔話の運命を探るにはまずこの変化を知ることが必要である。ついで第三章で、研究方法そのものをすこし詳しく述べて、さらに第四章では、研究作業を実行するにあたっての実際の指示を与えたい。最後にわたしは諸事情を明らかにするための実例として、普通に引用された昔話の主要内容を紹介しよう。本書の補充として、民俗学通報（F.F.C.）のつぎの号に（No. 14）研究に必要な昔話文献の概要を発表する。

わずか二、三の昔話を実例として利用するというわたしのやり方が、事実を説明するのに有

利かどうかについてはいろいろな意見があることと思う。昔話の数をもっと多くすれば、もっと変化のある例を選ぶことができたであろうということは認めなければならない。わたしのとりあつかい方は、昔話にあまりくわしくないひとでもさしあたり本書を利用できるような体裁にしようという希望に出たものである。そうしてだれもが詳しく知っており、必要とあればおなじ本のなかでくり返して読むことのできる昔話から実例があげられていると、それを理解することはうたがいもなくだれにでも比較的容易なことである。わたしが利用した昔話がい로운場合に対する例を示すのに十分であるということとは、本書を見れば明らかになるだろうと思う。

わたしはご援助を賜ったカールレ・クローン教授とアクセル・オールリク教授とに対して、ここに衷心からなる謝意を表明する。前者はその基礎的研究を通じてこの問題のために示された業績のほかに、わたしの仕事中所のご忠告によってわたしを助けられ、後者は研究中の民間文芸の根本問題をとりあつかった大著述の原稿を、わたしに閲読させてくださったのである。

一九三三年一月十五日　ベルリンにて

アンティ・アールネ

目次

序説

第一章 昔話の起源……………5頁

第二章 昔話の諸変化……………32頁

第三章 地理・歴史的研究方法……………51頁

第四章 昔話研究の技術……………74頁

第五章 実例として利用した昔話……………103頁

訳者あとがき

索引

第一章 昔話の起源

昔話の起源に対する疑問は、昔話研究者に熟考する多くの機会を与えてきたものである。昔話とは何か、それはどこで、いつ発生したのか、ことなる国々に類似の昔話があるのはどういうわけなのか。

これらの問題に解答をあたえることは、昔話をはじめて科学的に研究しはじめた人、すなわちドイツのグリム兄弟にとって、とくに困難なものと思われた。文献に関するかれらの該博な知識と深くかつ広くいきわたった洞察から生まれた考えは、当時世に行なわれていた考え、すなわち今日もなお科学的研究の発展にしたがわず、この研究によってえられた成果から遠ざかっている公衆のあいだで勢力のある考えとは、全然違ったものであった。昔話は「母親や保母が子供を楽しませるために考えたすふしぎな物語である。それは遊戯的な空想力の手軽な思いつきの作りものである。この空想力をもっているものならだれでもこういうものを作ることが

できる。そして物語りの仕方がたくみであれば、おとなでも楽しむことができるようなものである」こういう言葉で、一八六四年に、オーストリア人 J・G・v・ハーンは通俗的な見解を述べた。

グリム兄弟は、十九世紀の二十年代に著わしたかれらの有名な昔話集『こどもと家庭の昔話』によって、昔話研究の基礎をひらいた。かれらは昔話の起源に関する考えを、一部分はこの集に添えられた『註釈書』のなかで、一部分は他のところで述べている。

グリムの昔話集がそれ以前の類似の蒐集と違うのは、民間の物語が民衆の口から語られるままの形式で、故意に改変することなしに、保存されているという点にある。昔話を語られるままの形式で保存しようというグリム兄弟の努力は、かれらが昔話についてもつ見解からでている。すなわちかれらは昔話を古い神話と関係させた。かれらは昔話は古代アリアン神話の最後の反響であって、そのはじめはアリアン民族の共同の原郷土に見出されるとしている。神話がいろいろな民族のもとで、時がたつにつれて変化しまた変形して、ついにまったく亡びたとき、その残滓から昔話が成立した。したがってグリム兄弟は昔話をまずアリアン民族の財産とする。それゆえにかれらによって代表される考え方をアリアン説 (Arische Theorie) と名づけることができる。昔話の共通の外面的な限界とその類似性について、なかんずくヴィルヘ

ルム・グリムは「この限界は普通インド・ゲルマン民族と呼びならわされている大きな民族によって示されており、系統はその輪をしいに狭めてドイツ人の居住地に求めることができる。これはたとえば、個々の同じ語族に属する民族の言語に、共通なものと特殊なものとがあるのと同じ関係にある」といつている。しかしながらグリム兄弟は昔話がひとつの国から他の国へ移動することを、まったく否定しているわけではない。のみならず個々の昔話を観察すればある昔話がひとつの民族から他の民族へ移っていつて、未知の土地にしっかりと根をおろしているということは、ありうべきことだと考えているのである。

昔話に科学的意義を認めたがらない人びとの眼にその価値を高めさせるために、ヤーコプ・グリムは昔話の科学的取扱いを弁護するのが適當だと考えた。すなわち、彼はフェリックス・リープレヒトのペンタメローネのドイツ語訳の序文のなかで、つぎのようにいつている。「これらの注目すべき伝承にも、すべてまじめな、すべて正確な研究と調査とがさざげられていることに對して、いまではなんら弁明する必要はない。われわれは民族の言語や歌謡にも結局はまたあらゆる正確な研究と調査とをおこなわねばなるまい。これらの伝承はいままで長いあいだ、人目につかずにひそかにそうしてきたように、人を興がらせ楽しませつづけるであろうが、しかしこれらのものは今日では同時に科学的価値をも要求してよいのである。そうすれば確実に

はるかに広い一般的な承認をうけることとなるう」と。

昔話の起源に関するグリムの見解は一般に承認された。すでに述べたオーストリア人ハーンはその支持者のひとりで、かれはグリムの見解にしたがって最初の昔話類型の体系を組織した人である。さらに有名な東洋学者マックス・ミュラー、イタリア人アンジェロ・ド・グベルナティス、その他多数の人びとが、自然現象の立場から神話と昔話の発生を説明しようと試みた。この最後に述べた思想傾向の性質については「赤頭巾」の昔話に関するアンドレ・ルフェーヴルのつぎのような解釈がその一端を示している。「赤い頭巾は朝やけの赤であり、赤頭巾そのものは朝やけである。彼女が運ぶ菓子とバタ壺とは、おそらくは供物のパンと、供物として供えられたバタとをさすものである。祖母は古い朝やけを人格化したものである。それぞれ新しいものは、これにつづくものである。狼は焼きつくす太陽かまたは雲と夜である」こういう空想の遊戯の度が過ぎて、科学的真剣さはまったく消えてなくなりだしたのである。

グリムの見解が比較的まじめな反対にあうまでには長い時間を要した。一八五九年にゲッティンゲンのサンスクリット研究者テオドル・ベンファイが、パンチャントラのドイツ語訳の序文のなかで、昔話の起源についてあらたな見解を提出して、グリム兄弟によって昔話にあたえられた神秘的な神話的なヴェールをとりぞいて、これを文献と結びつけた。ベンファイ

によると、ほとんどすべての昔話はインドから出た。インドでは仏教がそれをつくったのである。——インド起源説 Indische Theorie という名はここに由来する——そうして昔話はインドから、主として文献の媒介によって全世界に移動したのである。イソップの寓話にある動物昔話だけは、インドの寓話のなかにあるものよりはもっと古い代表的なものであって、これだけは、反対の方向に、すなわちギリシアからインドへ移動したのである。インドの昔話はその性質がすぐれたものであったので、やがて、いろいろな民族に知られていたと思われる類似の物語を駆逐して、たやすくその民族のものとなった。ベンファイは昔話の分布は回教を奉ずる諸民族がしだいにインドを知るにいたって、インドの昔話集が翻訳によってアジア、アフリカ、ヨーロッパの回教諸国にひろまり、さらにそれらの諸国を通じてキリスト教を奉ずる西洋にひろまった第十世紀から起こったと考えている。東方と北方の諸領域へは、インドの昔話はこれらよりも早く、すでに仏教の文献とともに移動しはじめていた。文献による分布はまず第一にペルシアのトゥティー・ナーメ《鸚鵡七十話》とアラビアの文献、それから十中八九はたしかだと思われるが、ユダヤの文書であった。

これに似た見解はすでにこれよりも早く、研究者のあいだに知られていたようである。その証拠には一八四六年にヤーコプ・グリムがフェリックス・リープレヒトのペンタメローネの翻

訳の序文のなかでつぎのように述べている。「昔話は恵まれた場所で生い立ち、そこから、外部から指摘できるような大道小径を経て、遠くへ運ばれたのであるという謬見を棄てよ。そんなことはいまではすでに綿密な蒐集によって否定されている」

ベンファイの見解は、とくにすでに現われはじめていた真の昔話研究者たちのあいだに容易に地盤をえた。かれの支持者のうちもっとも顕著なものはラインホルト・ケーラーとエマヌエル・コスカンとである。前者は個々の昔話を時代的にできるだけ遠くさかのぼって追及する方法の重要性を強調して、この方法によればしだいにインドへ近づくと考えた。後者は近代のインドに類話があるということだけで、インドが起源であるということが十分証明できると思うにいたった。

昔話が歴史時代に発生したというベンファイの見解に対して、人類学者たちのあいだに昔話の起源を諸民族の原始時代におこうとする他の見解が起った。このいわゆる人類学説 *anthropologische Theorie* のおもな代表者は、イギリスの学者 E・B・タイラーと、とくにアン・ドリュウ・ラングとである。タイラーは人類の慣習と人類の信仰の領域の研究において、最古の宗教的原理、たとえば肉体と靈魂との相互関係、精霊などの見解は、一民族から他民族への影響なしにすべての民族に共通のものであったという経験に到達した。これらの理由によつ

て、人類学者たちは原始的な考え方や信仰や空想は、すべての民族において非常に似ているので、その結果いろいろな地域で独立に類似の昔話が発生したものであるという結論に到達した。前提となる精神状態がおなじだからこそ、おなじ結果が生ずるのである。したがっていろいろな民族において、昔話が一致するのは必ずしも相互の依存または借用を示すものではなく、昔話がいくども発生した結果である。

グリム兄弟がその当時すでにこのような見解の可能性をも認めたのは、かれらに先見の明があった証拠である。われわれは前に述べたことを『こどもと家庭の昔話』の第三巻からとつたつぎの言葉と比較してみよう。「しかし、自然に浮んでくる思想があるように、いたるところにくり返して起る単純で自然な状態がある。それゆえ、まったく異なった国々においてさえ、同一の、あるいはそうでなくても非常に似た昔話が、相互に独立に生じ得たのである。個々の単語が同系語でなくとも、自然音の模倣によってわずかな差異や、あるいはまったくおなじ単語を作りだすということと比較される」しかるにグリム兄弟のこういう考えは、かれらの主要見解にくらべると、たいして注意をひかなかった。

昔話の起源を説明するためのこれら三つの主要見解のうちで、グリムの見解は今日ではあまり意味をもたない。ペンファイの見解はその一面的なところは大いに緩和されなければならな

かったが、まだ二、三の研究者がこれを信奉している。これに反してもっとも新しいイギリス派の見解はまだ多くの支持者がある。

これらすべての説に対しては、異論があげられている。

まずグリムの見解についていえば、かれらが昔話の最初の起源をアリアン諸民族の原郷土に求めたことは、異なる国々の昔話のあいだにみられる一致を説明するには不十分である。もしこの一致が、こうした仕方で生じたものであるとしても、それはいかなる場合でも、物語の根本思想または主要特徴の範囲を出ないであろう。しかし現在ではごく重要でない細目においても、しばしば類似が認められるし、おなじ長い複雑な物語の構成が、異なった国々のあいだにみられるのである。

昔話がとくにインドゲルマン諸民族に属するものだというグリムの見解は、現代ではもはや信じられない。民間の昔話のたくわえが非常に増加しかつ研究が進歩したので、昔話がインドゲルマン諸民族に属するばかりでなく、同一の昔話が非常に異なる諸民族のもとでも見いだされうるということがはつきり証明されている。もしグリム兄弟が、現代の研究手段を自由に駆使していたならば、昔話がインドゲルマン諸民族のみに属するというかれらの考えは、けっして起こらなかったにちがいない。われわれはヴィルヘルム・グリムのつぎの言葉から推測できる

ように、かれら自身も部分的にはこの意見の永続性を疑っていたのである。すなわち「ここに示された限界は、今日のところでは確実だと思われるが、もっとほかの資料があらわれれば、おそらく拡張する必要が起るかもしれない。なぜなら、驚いたことには、ボルヌーのニグロや南アフリカの移動民であるベチュアー族のあいだで知られている昔話は、たしかにかれらなりの独特な考えかたも入っているけれども、ドイツの昔話とのあいだにある種の否定することのできない関連がみられるからだ」

ベンファイ説は、昔話がいりいな国で一致していることを、相互の借用に帰する点で大いなる進歩を示している。かれの説によると昔話には一定の誕生地があつて、そこから他の場所へ伝播したのである。しかしほとんどすべての昔話の郷土をインドにおくのはあきらかに誤りである。インドでは、古い時代に多くの昔話が知られまた愛好されていたからといって、この前提を主張する権利を与えられているとはいえない。なぜわれわれは他の諸民族が昔話を創造する能力を否定しなければならないのか。この問題はベンファイが動物昔話をギリシアから出たものとして、例外と考えているだけにますます疑惑を抱かせる。また、ギリシア人がある種の昔話を創造したことを認めながら、他の領域ではこれを認めないのは不合理だといわれたが、それは当然である。昔話のインド起源に関するベンファイの意見には、多くの昔話がイン

ド以外の場所でも発生したということが研究によって説明されてから、その意義をすべて失ってしまった。

ベンファイが昔話の伝播に際して、文献の価値をあまりに大きく評価していることも正しくない。加うるに、たぶん、かれを誤らせたのは、古いインドの昔話の文献が豊富で、それに對抗する民間の昔話の資料が、かれの時代にはまだほんのわずかしかなかったためであらう。インド昔話の比較的古い文献が現存しているからといって、この文献の編纂物が他の国々で民間の物語として知られている昔話の本源であることを意味するものではないという考えは、きわめて自然である。民間の物語はどのくらい前からかは解らないが、民衆の口頭に生きていたのである。さらに個々の昔話の研究によって、民間の昔話がインドまたは他の文献編纂物にあらわれたものよりも古い昔話形式をあらわすものであり、そのために研究者は民間の昔話に特別の注意をはらわなければならない、ということが確かめられたのである。

さらにまた人類学説についていえば、この説には興味深い点や、理論的によく考えぬかれた点が多々あることは争うべからざること、一定の研究領域では疑いもなく大きな意義をもっているが、昔話の起源の問題を説明する能力はきわめてわずかしかない。自然状態で生活している諸民族のもので、類似の観念や想像が発生するということはありうることである。たとえ